

## Uさんの思い出

Uさんのことを考えるとき、先日朝日新聞の「声」欄に載っていた記事を思い出します。

『認知症 新しい力生む』という、お母さんを介護した大阪の女性の投稿でした。

「(中略)しかし私の母の場合は、認知症になったことで獲得した新しい力もあった。82歳ごろから5年間介護した母は、家事全般に堪能で有能な人だった。性格はごくおとなしかった。だが認知症になってからは、家の窓から家出して警察で保護され、私が迎えに行くと5人の屈強な警察官が困り果てる中で傲然としていたこともあった。車椅子生活になってお世話になった施設で若い男性職員に恋をし、「好きです」と告白した。眠ってばかりになってからも、私が訪れ、昔の童謡や歌謡曲を歌うと目を開き、花が咲くようにほほ笑んだ。認知症になったことで心に新しい力を獲得したのか、それまでの抑制が外れて隠されていた力が現れたのかはわからない。だが母の場合は決して失う一方ではなかったと思う。」

このような内容でした。

Uさんも、奥様や息子さんのお話を伺うととても真面目で仕事熱心、家庭を愛する穏やかな性格だったと察します。新聞をスクラップしたり自分史をまとめたりと、細かく知的な作業を好まれ、退職後には色々なお付き合いがあり、あちこちに気を使われていたのではないのでしょうか。

ともの家に来られた頃はすっかり今までのしがらみが吹っ切れており、皆から日本人離れしている容姿を褒められると「ロシアの血が混じっていますから」ともっともしごくに返されました。だから背が高く色白で彫が深い顔立ちなのだなあ、とみんな納得。Yさんなど、信じ切って英語で話しかけておりましたが、実は全くの嘘で純・日本人だとお聞きしてびっくり、すっかり騙されたのでした。

レクリエーションにも率先して参加、大きな声で歌い、張り切って体操され、ムードメーカーでした。午後からは静かな棟に移動して、



ご自分の気に入った窓側のリクライニングチェアに腰かけてうとうとされていました。散歩に行くと大きな木に感動し、幹を抱きしめていました。時どき女性職員をからかい、バレンタインデーでは奥様に「愛してる」という絵手紙を書いてプレゼントされていました。

朗らかで楽しくマイペースな人柄でした。決して他人と衝突せず、すべてあるがままを受け入れ、Sさんとは男の友情を結ばれて一緒に話をしておやつを食べたり（目の見えないSさんに食べさせてあげていました）、Kさんとは向かいの席でお互いの皿やカップを譲ったり奪ったりしながら仲良くご飯を召し上がっていました。Sさんが夏の終わりに倒れてしまい、代わりに11月の文化祭では「水戸黄門」の主役を務めてくださいました。Sさんよりは線が細くて上品な黄門様でしたが、悪代官の処遇を求めたところ、「天を憎んで人を憎まず」許してやるという今もなお語り継がれる名演でした。



一昨年の12月に脳梗塞を起こされ、歩行器での機能訓練を行い、少しすると歩けるようになり、食べられるようになって安心したものです。HさんやYさんが食べさせてくれると自分で食べられるのに上手に口を開けていました。人を傷つけないように気を使われているのか、省エネなのか、両方だと思います。

Uさんにはたくさんの喜びや楽しさを与えていただきました。最後の日々を、ともに過ごさせていただいて感謝しております。夏には体力が落ちて心配しましたが、敬老会頃からまた復活され、よく食べられるようになりました。冬にはすっかり元気を取り戻し、ほぼ一人で歩き、食べ、ミキサー食から普通食になりました。12月27日、お餅つきに近くの幼稚園児を招待するとUさんはとても喜ばれ、握手を求めていました。つきたての餅も難なくかぶりついておられました。お正月には長男さんご一家と楽しく福笑いをし、お屠蘇をのんでおせち料理をたくさん召し上がりました。2日には伊佐爾波神社に初詣に出掛け、甘酒に舌鼓を打たれていました。春先に第二ともの家の軒下で生まれた猫を愛され、いつも気にかけておられました。1月7日、前の日までお元気だったのに急に高熱が出ました。肺炎との診断、入院されとても寂しく残念でした。退院されたときには思っていたよりはお元気で、コーヒーを飲み羊羹を食べてほっとしていたのですが…。次の日、日だまりで猫を見ていると猫のほうがUさんに近づいてきて、その手から餌を食べました。その時のUさんの嬉しそうな顔と、穏やかな光景が忘れられません。あの瞬間はUさんからのプレゼントだったのだと思います。ここに戻ってきてくれたこと。好きなものを食べ、愛する猫と戯れ、満ち足りた時間を送られたこと。私たちへ素敵な思い出を残していただきました。本当に優しいUさんです。



認知症になり、変わったことと変わらないことがあると思います。Uさんは生来の生真面目な性格がとぼけて親しみやすさを増し、吾も紅で皆に愛されました。でもその根底にある、善良で優しく、柔和な人格は生涯変わらなかったと思います。私は希望を込めて、Uさ

んの最後は失う一方ではなかった、と思っています。奥様をはじめ、暖かい家族に囲まれ大切にされながら、多くの友人を獲得され、過度な医療行為を拒み自分の生き方を貫かれました。最後の瞬間まで、食べることができ、話すことができるケースは本当に稀だと思います。Uさんは天に愛されていたのだと思います。

至らない点多々あったと思いますが、ご家族の皆様には温かなご支援をいただき、心より感謝いたします。Uさん、本当にありがとうございました。

永和 里佳子